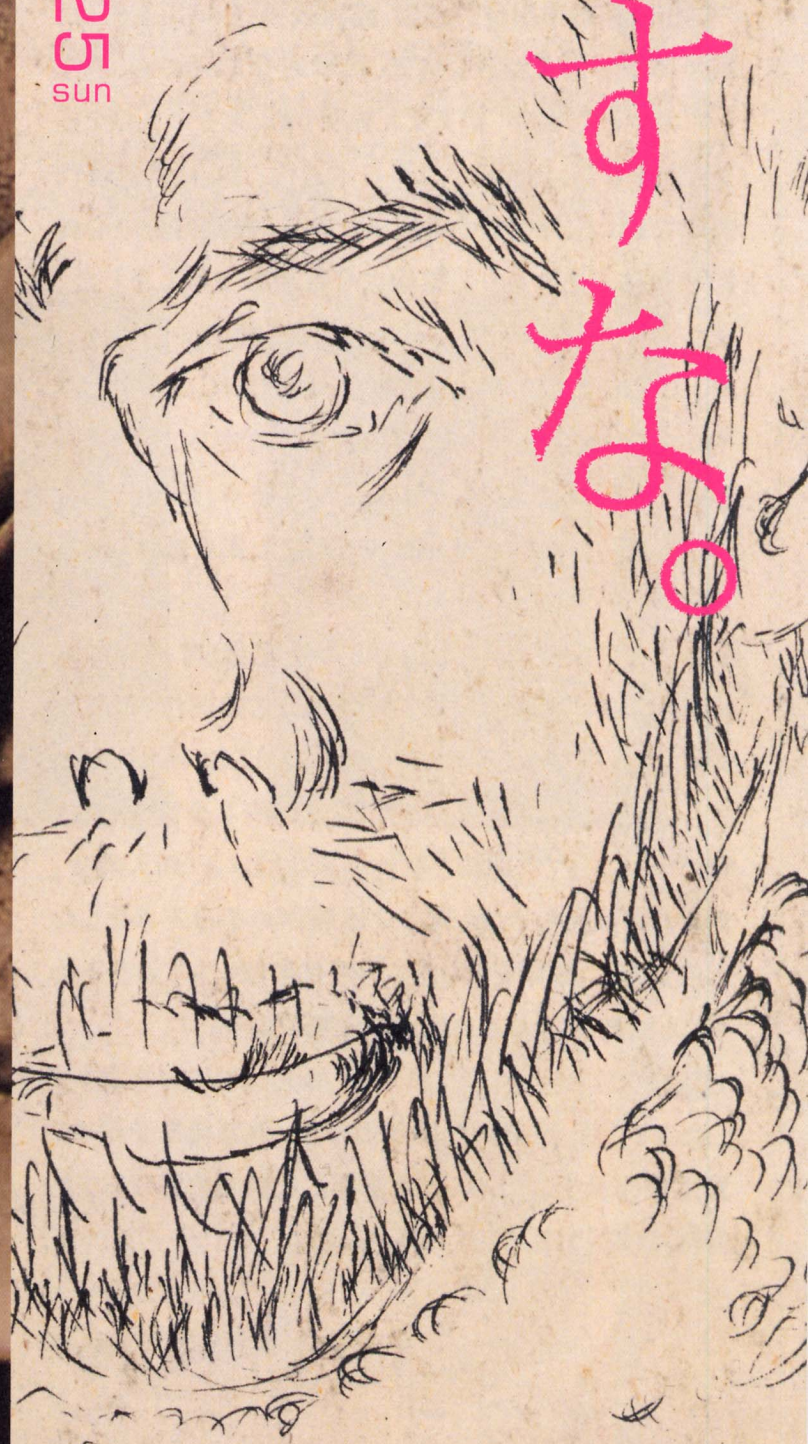


# 人、鶴岡政男

特集展示 生誕100年

2018.2.10 sat - 3.25 sun

# 逃がすな。



高崎市美術館  
TAKASAKI MUSEUM OF ART

《自画像》1947年 インク・紙 群馬県立近代美術館蔵

# 人、 鶴岡政男

の  
逃がすな。

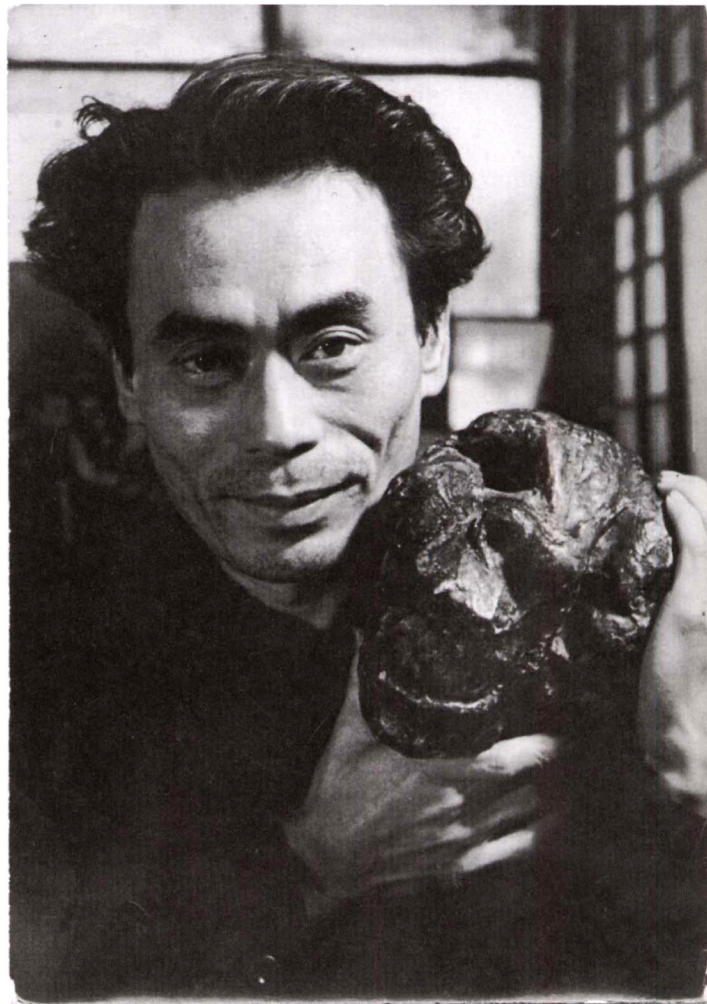
## ごあいさつ

群馬県高崎市出身の画家、鶴岡政男(1907-1979)は、戦争体験や友人である鬚光、松本竣介の死の影、みづからの生活苦の中、絶えず人をみつめ、人そのものを描き続けました。1930年代より日本近代、さらには同時代美術を鋭いまなざしで射抜きながら、鶴岡自身の心の影や身体をありありと想像させる油彩を残しました。また1961年以降制作したパステルは、「動きの中にリアリティを把握する」と語る目と手と心が刻まれ、ときに色鮮やかで温かくユーモラスな表情をみせながら、一筋縄ではいかない鶴岡その人の真実を宿します。鶴岡政男がみつめ続けた「人」とは、そして人の光と影を描き出した「鶴岡政男」とは、いったい...

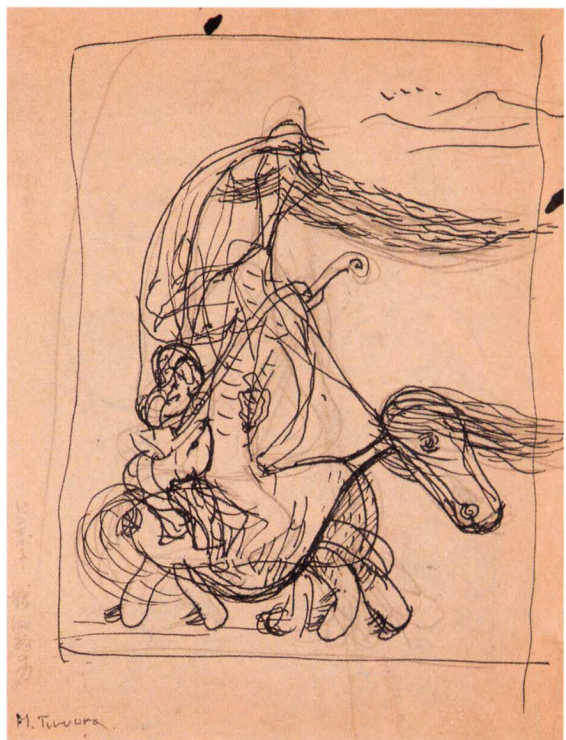
本展では2017年2月の生誕110年を記念して、当館コレクション、県内美術館の300点を越える鶴岡作品コレクションなどから、油彩34点、パステル17点、素描38点、さらには立体など9点、計98点をご紹介します。同時に戦時下にあっても純粋な制作発表を続けた「新人画会」からの友人たちや、鶴岡に立体制作の手ほどきをした木内克<sup>きのうちよし</sup>など、鶴岡を取り巻く同時代作家たちとのかかわりにも触れ、内と外から鶴岡の深層に迫ります。

最後に本展の開催にあたり、多大なご尽力を賜りましたよしだひろこ様、鶴岡美直子様、磯部真知子様や、貴重な作品をご出品くださるなどご協力を賜りました皆様に、厚くお礼申し上げます。

2018年2月 主催者



《転がっている首》を手にして(1950年頃)

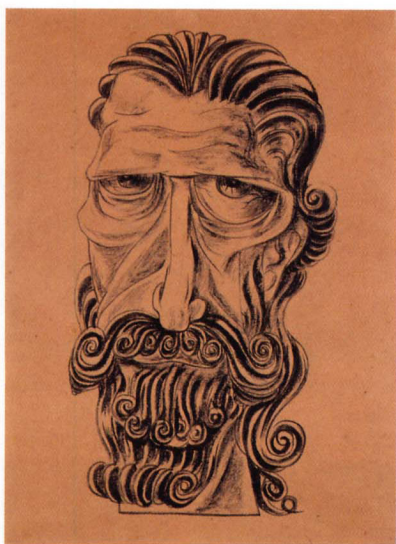


《ドン・キホーテ》1946年頃  
鉛筆・インク・紙 高崎市美術館蔵

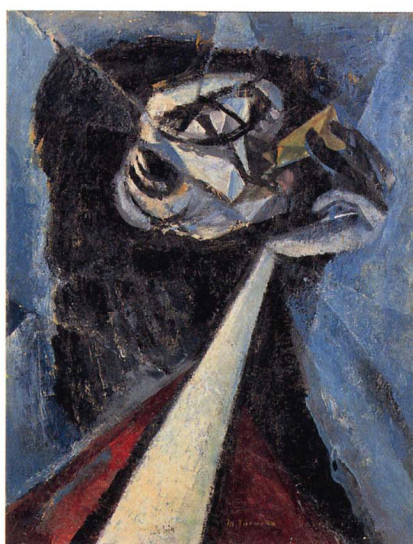
## 第1章

### 1949年まで「オレが絵を描く人間であることをみんなが喜んでくれば嬉しい」

鶴岡政男が戦後描き始めたばかりの頃家族に伝えたとも、遺言ともいわれる言葉である。画家は「絵を描く人間」であることから逃れられない。「絵描きである本当の鶴岡政男」を「逃がすな。」—それを展覧会の合言葉としたい。鶴岡政男は1907年高崎市に生まれ、1922年画塾の太平洋画会研究所に入り、兵役を挟んで6年在学、1928年には一九三〇年協会展に初入選、のちグループ展や公募団体「NOVA美術協会」を結成するなど画家として出発した。1943年鶴岡を日本近、現代美術になくてはならない存在にする理由の一つである「新人画会」の結成に参加。再召集され騎兵として赴いた中国大陸で、戦争の非人間性に悩まされ、兵役解除後も生活のために絵から離れた鶴岡を「新人画会」に誘い、再び画家として歩ませたのは画塾からの友、井上長三郎だった。1944年にかけて3回のみ開かれたグループ展だが、<sup>あみつ</sup>鬘光や松本竣介も代表作を出品、戦時下に戦争記録画を描かず良心の灯をともし、のち「戦後美術の起点」ととらえられるようになる。東京大空襲で焼失した戦前期作品は図版や素描、再制作品から想像するしかないが、たとえば1940年の《春風のドン・キホーテ》についての「鶴岡さんが二人居てその目は重り合って二人で三つの目が描いてありました。」という証言は、戦後の《ふたり》(no.30)、《夜の群像》(no.33)などの二重像と重なる。主題をさかのぼると「頭の中に入って消えちゃうようなもの」と語る鶴岡の心の中には、兵役後、分ちがたいがぴったりと重ならない二重像、おそらく葛藤がすでに芽生えていた。



《西方の聖》1935年頃 墨・紙  
群馬県立館林美術館蔵 ※2/10～3/4展示



《薬を飲む女》1948年 油彩・キャンパス  
浅尾空人氏蔵



《小鳥と少女》1952年頃 油彩・ガラス  
浅尾空人氏蔵



太平洋画会研究所時代  
(左より松本竣介、鶴岡政男、北川實、長谷川利行)

## コラム1 | 仲間たち

### 家族・新人画会の仲間

家族を描いた作品が残されている(nos.5-9)。鶴岡は妻もとの間に生まれた三人の娘をととても可愛がった。戦後一家が移り住んだ「ボタン落としの難所」と呼ばれる谷中の住まいで、鶴岡は子守りをしながら家族をモデルに描き始める。家計を支える妻との口論は絶えないが、家族に注ぐ鶴岡のまなざしは温かい。身近な家族を愛情込めて描くことから絵を再開したことは、以後の鶴岡の仕事に少なからぬ意味を持つ。

戦時下の1943年に結成した新人画会の仲間たちは、それぞれに「自分が描きたい絵を描く」意志を持ち集まった同志。「私が絵をかくようになったのは井上長三郎のおかげだからです。戦争中、NOVA〔註：鶴岡らが結成した公募団体「NOVA美術協会」のこと〕をやめたあと徴用でずっと絵をかいていないわたしを新人画会にひっぱってくれたのは独立〔註：独立美術協会のこと〕の会員だった井上なんです。」鶴岡を画家の道へと導いた井上長三郎を、鶴岡は後年「一番親しい人」に挙げている。立体は近所に住む彫刻家木内克きのうちよしから手ほどきをうけた。「彫塑もやってみると面白い。立体であるから、絵と違った、空間の問題を持っているので勉強になる」と、展覧会への出品のみならず自作の茶碗を売って生活の足しにするなど、表情豊かな立体作品は貧しい中にもユーモアあふれる鶴岡の横顔をしのばせる。(K)

## コラム2 | 釣り

### 貧しい時代に新たな才能が開花

戦後の鶴岡は、「飯のための絵は描かない」と谷中の家にこもり絵を描く一方、御徒町で手作り団子や大福餅を売るなど生きるために家族と協力して何でもした。中でも器用な鶴岡がのめり込んだのが釣りだった。戦前、内職の蒔絵に使う漆にかぶれて苦しむ鶴岡に、妻もとが外出を勧めたのがそもそものきっかけだった。長女ひろ子いなかを連れた蝗捕りから始まった気晴らしは、やがて「腹の足しになるものを」と、自作釣竿つりざおを持参して黒鯛釣りに横浜まで遠征するほどになる。もとも休日には同行し、家族旅行を兼ねた楽しいイベントとなった。竿作りにも凝りはじめた鶴岡は「竿政」を名乗り、大漁の際は仲間にも鯛を振る舞った。ある知り合いの画家は、あまりに鶴岡から鯛ばかり買われるので、もう料理屋でも鯛だけはみるのもいやになったとか。「魚は永遠の命を表わし、無限大の意味がある」と語る鶴岡は、釣果を絵にも描いており、《魚》(no.25)は、船に似た魚の骨の絵。食べ残しの骨を船に見立てて「この船に乗って広い海へ漕ぎ出すんだよ!」と次女美直子に語ったという。釣れない日には捕まえたかに《蟹》(no.27)が食卓に上るご馳走になった。また《恋人》(no.24)は、長女ひろ子が後年発行した同人誌を飾った。生活苦を支えた魚は時を超え、家族をつなぐ大切な思い出にもなっている。(K)



麻生三郎《鶴岡君》1940年代 鉛筆・紙 個人蔵



《人体》1951年 テラコッタ 群馬県立館林美術館蔵



《獲物》1948年 油彩・キャンバス 個人蔵



《蟹》1948年 鉛筆・紙 高崎市美術館蔵

## 第2章

### 1950年代「動きの中にリアリティを把握する」

谷中にみつけた借家で鶴岡の戦後は始まる。玄関は体を横にしてやっとすり抜けられるくらいにしか開きも閉まりもせず、ボタンを引っ掛けて落としてしまうので「ボタン落としの難所」といわれた。生活苦の中とまかく身近なモチーフのデッサンから再出発する。まず自分であり家族であり、生活の足しとして、家族の行楽として始めた釣りであり、人体であり、ひょっとすると《死》や《転がっている首》(no.19)だったかもしれない。1947年新人画会の仲間と自由美術家協会に合流した鶴岡は、1971年まで出品する。また1949、50年描きためた新作を個展で発表。生活感情から出発しつつ、時代や社会情勢を二重に写し取る《夜の群像》(no.33)や《重い手》は、多くの人に暗い時代の只中で目覚めようともかく自分の姿と受け止められた。戦争の非人間性をへてヒューマニズムとリアリズムが同時代の課題だったが、足元の生活から再出発した鶴岡にとっては、写すだけのリアリズムではなく、「生命の裏うちを持った」リアリティこそが主題だった。『美術批評』誌上座談会タイトルにもなった「事」ではなく「物」を描くということ」とは、まず描く物や技法や画材という原点に立ち、その上で真の主題として人間の身体と心を丸ごとみつめるべきだという主張だった。絵空事にも他人事にもしないこと。そしてみずからをさえ物としてみつめる醒めた目を持つこと。みずからと対象こそ分かちがたい二重像に他ならない。その葛藤をみつめる鶴岡の目に世界は動き、うつろい続けてやまない。それをとらえることこそが鶴岡のリアリティだった。



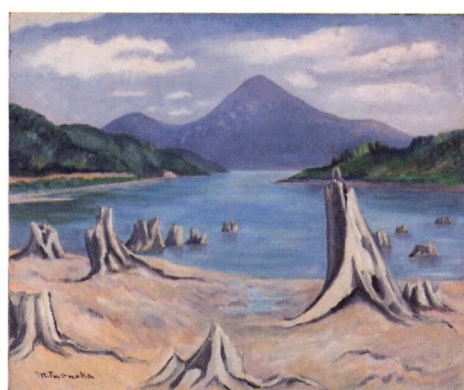
《落下する人体》1954年  
油彩・キャンパス  
群馬県立近代美術館蔵



《雨の夜》1959年  
油彩・キャンパス  
群馬県立近代美術館蔵



《仮面(マスク)》1958-59年頃  
織物・毛糸  
高崎市美術館蔵



《朝のみづうみ(磐梯山風景)》制作年不詳  
油彩・キャンパス  
群馬県立近代美術館寄託 松尾陽作氏蔵

### コラム3 | 風景を描く

#### 心の中のみづうみ

《朝のみづうみ(磐梯山風景)》(no.44)は奇妙な絵だ。写生ではなく、朝の磐梯山は彼岸のイメージとして選ばれているように思う。1964年の恐山旅行の際、磐梯山にも足を伸ばしたのか。恐山シリーズには題に湖のつく作品が複数ある。恐山が鶴岡に彼岸を強く意識させたことは知られている。目に見える風景として彼岸を描きたかった気持ち、それは供養ではなかったか。するとどこか現実離れた空気にも、あえて抽象画にしなかった心情にも共感できる。何の変哲もない風景の奥底には冷え冷えと彼岸の風が吹いている。薄皮一枚の「今、ここ」の下には、時のながれや情念が積み重なって、目に見えないものを私たちは感じる。さかのぼると《静かなる夜(山と月と湖)》(no.43)も、黒い月は鶴岡得意の二重像だし、不穏な空気にも葛藤が見え隠れする。1951年講習会で訪れた札幌で知り合った17歳の女生徒が、翌年阿寒湖の氷上で凍死し、のち小説や映画にもなるのだが、この絵が描かれたのは3年後。湖という主題と「静かなる夜」という題に、鎮魂の思いが込められていると考えるのは単純すぎるだろうか。人間を主題にする鶴岡が珍しく繰り返し描いた風景。それが湖だとすると、やはり人間やみずからと切っても切れない主題であり心の風景に違いない。そこに供養や鎮魂の想いがにじむのも、ごく自然なことだと思う。(S)

### 第3章

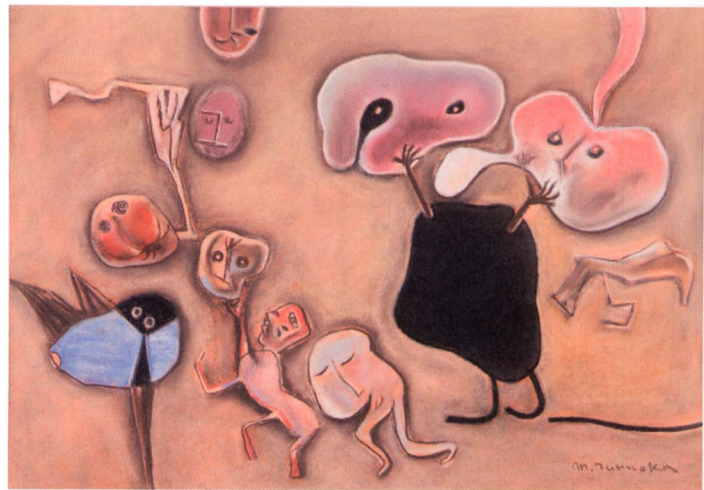
## パステルと素描「<sup>あいぶ</sup>愛撫することにも似て」

1962年頃の新宿には、のち「ヒッピー族」と称される「フーテン族」の若者たちがたむろしていた。打楽器演奏にのめり込んでいた鶴岡は、流行のモダンジャズ喫茶で知り合った「フーテン族」の若者たちと積極的に交流した。音楽や踊りに興じる鶴岡の身体は、指を使って描くパステルにそのまま現われる。「<sup>あいぶ</sup>愛撫することにも似て」と鶴岡らしい体感を素直に言葉にしている。「パステルなんてめしのたねだものね。」と、あくまで手遊びという姿勢も崩さないが、喘息が持病の鶴岡にとって、粉を指でこすったり息を吹きかけながらのパステル制作は、骨身を削る作業でもあった。他界したとき、肺にパステル由来と思われる金属の粉が溜まっていたともいわれる。パステルは1961年頃から1970年頃まで集中して描かれ、1966年から71年まで毎年パステル中心の個展も開催する。深みのある色合いから淡い色彩、濃く太い線、輪郭が柔らかくぼやけた色面など、表現の可能性を熱心に研究し、作品ごとに描き分けている。

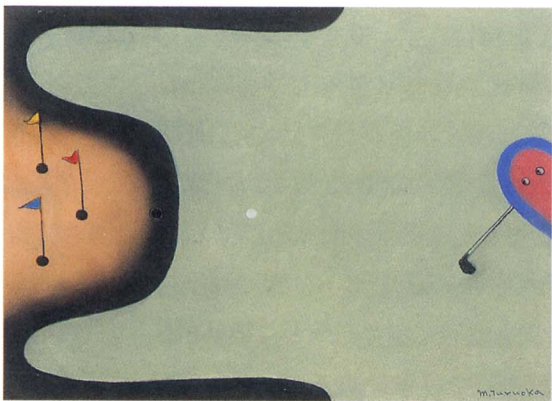
一方、素描は幅広い時期の作品が現存し、戦前の風刺を込めた肖像画、戦後間もなくの日常を穏やかにとらえた作品などバラエティに富む。とりわけ生涯にわたり描き継がれた裸婦は、初期の細い線描から、ぐにやりとうねる線、太い簡潔な線など画材やタッチで変化する。力強い女性像には、戦後の女性解放という社会情勢に加え、知人女性の姿も投影されているだろう。油彩では一般的な女性像を描いているが、実在のモデルを描く素描では、その女性の個性、とくにしなやかさや強さを描いているといえるだろう。



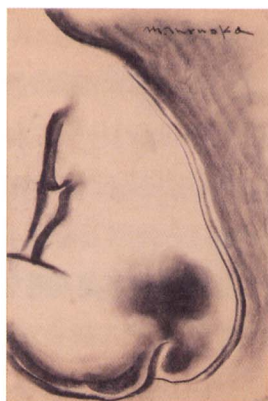
《原始(赤)》1962年 パステル・紙 高崎市美術館蔵



《仮面の踊り》1964年頃 パステル・紙  
FUMA Contemporary Tokyo|文京アート蔵



《ゴルフ》1966年頃 パステル・紙  
(公財)大川美術館蔵



《裸婦》制作年不詳  
コンテ・紙  
高崎市美術館蔵



《馬と人》1947年 水彩・墨・紙 高崎市美術館蔵

## 第4章

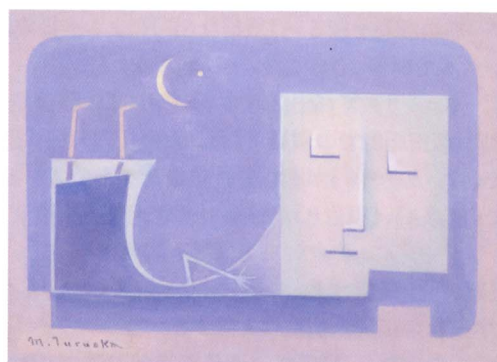
### 1960年代から「絵にならないものを描こうとする」

1961年以降パステルと油彩を同時制作する。鶴岡にとってパステルは単なる下絵ではない。《微笑》(nos.83,84)ではパステルの静に対し、油彩の動というタッチの変化がみられる。《オレンジの騎士》(nos.78,79)と《夜の騎士》(no.80)、《夜の騎士》(no.81)では騎士のイメージが騎士に変化していく。技法や画材を変えることで、タッチも構図も変化し続ける。同構図をパステルと油彩で繰り返し描くのは、イメージをたえず更新し続けるためだった。素描で引かれる線は、パステルで幅の広いタッチに変わり、さらに油彩の色面となる。鶴岡にとって線を色彩の広がりに変えることは、技法や画材の変化にとどまらない。情にまかせて引く線から少しずつ退きながら、想念のイメージに変える心の営みに他ならなかった。

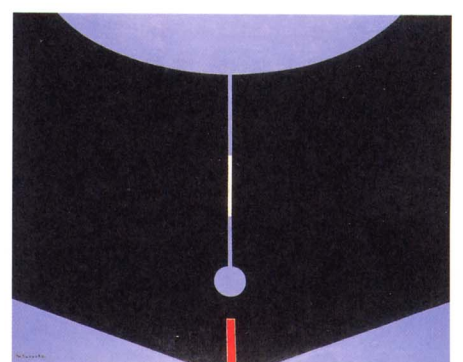
1964年以降油彩では薄塗りの色面によって描くようになる。情をタッチに塗り込めるのではなく、イメージのみで想念を、「絵にならないものを描こうとする」。それは人間という主題をみずからの想念によってみつめる試みだった。しかし《涙》(no.93)では色面や線描のタッチがうごめいて、とても均一な薄塗りとはいえない。抑えられた表現の一枚下から、ユーモラスなイメージや薄塗りでは鎮められない鶴岡の体臭が染みだしてくる。愛を柔らかかに描く《春の野》(no.97)の男女の境が消える睦<sup>むつ</sup>みの情景にも、みずからと対象との二重像が重なる。分かちがたいが重ならない二重像。その境を最期まで見極めなかった鶴岡が描こうとした「絵にならないもの」とは、見極められない境そのものだったのかもしれない。



《みどりの女》1963年 油彩・キャンバス  
群馬県立近代美術館寄託



《眠る人》1976年 油彩・キャンバス  
群馬県立館林美術館蔵



《MEDO(メド)》1967年  
油彩・キャンバス 群馬県立近代美術館蔵

## コラム4 | 馬と鶴岡

### 馬イコール鶴岡

「青い馬が見える。走ってくる。」

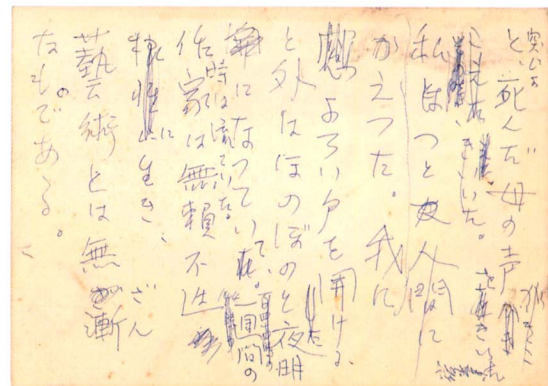
息を引き取る直前、病床の鶴岡は夢うつつの中、妻もとに青い絵具を求め、つぶやいた。

1927年1月、20歳の鶴岡は千葉県習志野の騎兵連隊に入隊、9月に馬に蹴られて入院し、翌月兵役免除となる。「まさおは、馬のケツメド(註:肛門のこと)を見る/まさおは、/まさおのケツメドを思う/まさおは馬のケツメドを見て/こぼすだろう」という当時の詩の一節は騎兵生活の悲喜を描くが、1937年騎兵として再召集、中国で戦争の非人間性を強烈に体験したことも忘れてはならない。のち部屋の壁をぐるりと取り巻くように紙を貼り、一列に並んでいる馬を墨で描いたとも。また《森の騎士》という絵の馬が「顔は鶴岡さんそっくりですね」といわれれば「そうなんですよ」と半ば自画像と認めている。ドン・キホーテ(nos.34,35,77)や騎士(nos.78-81)など、描き続けるうち馬の体は画面からはみ出して《MEDO(メド)》(no.82)、つまり肛門のみの構成に至る。入隊中、馬の尻ばかり見て過ごした鶴岡青年は、その後の人生で馬とどんなふうに向き合ってきたのか。いまわの際になお追い続けた「青い馬」とは鶴岡にとってどんな存在だったのか?もはや彼岸の鶴岡に聞くほかない問いだ。(K)

# 鶴岡政男年譜

- 1907(明治40)年 2月16日、木ノ内峯吉・はつの長男として群馬県高崎市砂賀町に生まれる。
- 1913(大正 2)年 6歳 高崎市立南小学校入学。
- 1914(大正 3)年 7歳 母の再婚により、鶴岡姓となる。小学校5年生より東京で暮らす。
- 1921(大正10)年 14歳 文京区本郷高等小学校卒業。
- 1922(大正11)年 15歳 太平洋画会研究所に入る。のちに井上長三郎、鬚光らが通うことになり親交が始まる。
- 1928(昭和 3)年 21歳 第3回一九三〇年協会展に初入選する。
- 1929(昭和 4)年 22歳 太平洋画会研究所除名処分に抗議した仲間とともに洪原会(こうげんかい)を結成する。
- 1930(昭和 5)年 23歳 洪原会を解散、NOVA(ノヴァ)美術協会を結成する。
- 1935(昭和10)年 28歳 初の個展を団子坂の喫茶店リリオムで開催する。
- 1937(昭和12)年 30歳 NOVA(ノヴァ)美術協会を解散する。工藤もとと結婚する。召集され中国で軍務に就く。戦争の非人間性に悩む。
- 1941(昭和16)年 34歳 第28回二科展に入選する。
- 1943(昭和18)年 36歳 鬚光、麻生三郎、糸園和三郎、井上長三郎、大野五郎、寺田政明、松本竣介とともに新人画会を結成する。
- 1945(昭和20)年 38歳 東京大空襲によりこれまでの作品を焼失する。
- 1947(昭和22)年 40歳 新人画会会員の大半とともに自由美術家協会に合流、会員となる。
- 1949(昭和24)年 42歳 第1回鶴岡政男個展を日本橋・北荘画廊で開催する。第13回自由美術展に《夜の群像》などを出品する。この頃、木内克のアトリエで立体を制作する。
- 1951(昭和26)年 44歳 高崎・珍竹林画廊で個展を開催する。
- 1953(昭和28)年 46歳 第2回サンパウロ・ビエンナーレに《夜の群像》、《天使》を出品する。
- 1954(昭和29)年 47歳 『美術批評』誌上座談会で「事ではなく物を描くこと」を主張する。第1回現代日本美術展で《落下する人体》が佳作賞を受賞する。
- 1961(昭和36)年 54歳 テレビ番組「美術サロン」心の深層を探る・幻想剤(LSD)による美術実験」に出演、LSD注射による実験制作を行う。
- 1962(昭和37)年 55歳 鶴岡政男作品展を東京・大丸で開催、初めてパステルを発表する。
- 1963(昭和38)年 56歳 銀座・飯田画廊の個展に「ポコシリーズ」を出品する。第7回日本国際美術展で《夜の祭典》が優秀賞を受賞する。
- 1964(昭和39)年 57歳 青森、恐山に旅行後、銀座・飯田画廊での個展に《ねぶたの行列》など「恐山シリーズ」を発表する。
- 1965(昭和40)年 58歳 第8回日本国際美術展で《青いカーテン》が国立近代美術館賞を受賞する。
- 1966(昭和41)年 59歳 第7回現代日本美術展で《視点A》、《視点B》が神奈川県立近代美術館賞を受賞する。
- 1969(昭和44)年 62歳 高崎・群馬県美術館ファンデーションギャラリーで個展を開催する。
- 1976(昭和51)年 69歳 腹膜炎手術で国立横須賀病院に入院する。
- 1977(昭和52)年 70歳 肺真菌症のため東京大学医科学研究所病院に入院する。
- 1979(昭和54)年 72歳 「戦後洋画の異才 鶴岡政男の全貌」が群馬県立近代美術館で開催され、代表作など172点が出品される。9月27日、癌のため逝去する。

\*作成にあたり、三田英彬著『芸術とは無慚なもの—評伝・鶴岡政男—』(山手書房新社・1991年発行)、鶴岡美直子著『ボタン落し』(美術出版社・2001年発行)、『生誕100年 鶴岡政男展』(群馬県立館林美術館、神奈川県立近代美術館鎌倉・2007年発行)を参考にしました。記して謝意を表します。



「藝術とは無慚なもの」を記したスケッチブック

## 生誕110年 人、鶴岡政男

2018年2月10日(土)～3月25日(日)

主催・会場 高崎市美術館

謝辞: この展覧会のために貴重な作品や資料を貸与され、また、ご協力いただきました下記の皆様に深く感謝の意を表します。

よしだひろこ 鶴岡美直子 磯部真知子

阿久津功 阿久津画廊 麻生マユ 浅尾空人 株式会社南天子画廊 群馬県立近代美術館 群馬県立館林美術館 (公財)大川美術館

新田安紀芳 FUMA Contemporary Tokyo|文京アート 松尾陽作 (敬称略)

編集・発行: 高崎市美術館 住田常生(1,2,4章解説、コラム3、年譜) 笠原晶子(3章解説、コラム1,2,4)

〒370-0849群馬県高崎市八島町110-27 Tel.027-324-6125 <http://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2014011000353/>

制作: 株式会社原人社